日本図の変遷
～赤水から伊能へ～

小野寺淳　平井松午

……6

知識人との交流―京・大坂への遊学

長久保赤水が著した日本図、世界図、中国図などは、当時の文献や地図を詳細に考証するとともに、多くの知識人との交流によって得た知識が加味されていた。詳細な山川や地名の名称が記載された赤水図の一つの特色である。長久保赤水が著した地図や書物に、当時の著名な知識人が序文を書き、また知識人からの書簡が多く残されていることからも明らかである。

古くは杉田雨人著『長久保赤水』で、その交流関係の一端が記載され、近年では赤水顕彰会顧問の長久保片雲氏が『長久保赤水の交遊』で、知識人との交流をまとめた。多くの書簡を解読した横山功氏は『長久保赤水書簡集』を続・続続と刊行し、赤水と知識人との交流を詳細に知ることができるようになった。

幼少時の恩師、彰考館を通した水戸徳川家中の学者、京・大坂遊学で知己を得た文化人、そして江戸藩邸で居住していた際の知識人との交流に分けられる。なかでも一七七四（安永三）年二月から京都・大坂へ一年三カ月に及ぶ遊学で交流した人々は、実に多彩である。

その第一は、大坂の豪商坪（壺）井屋吉右衛門こと、木村兼葭堂であったろう。彼は醸造業などの家業に精を出したばかりではなく、実証的な本草（医薬）学者であるとともに博覧強記な蔵書家であった。兼葭堂とは号であるとともに、収集した奇書・地図、骨董などを集めた博物館の名称でもある。兼葭堂収集の地図を写したと想定される地図が赤水子孫宅には残されており、親密な関係であったと思われる。また、大坂の書肆（江戸時代の出版業者）との交流も生まれ、赤水作の地図が大坂の書肆から刊行された契機となったのであろう。

儒学者の皆川淇園とは、京で再会した。赤水著『清槎唱和集』の淇園の序文によれば、赤水と淇園は長崎で知り合ったことがわかる。常陸国磯原の漁民が漂流民となり、彼らを引き取りに長崎に赴いた際、二人は知り合ったらしい。京で再会したのが機となり、赤水の求めに応じて序文をしたためたことがわかる。

当時、京で塾を開いていた柴野栗山宅では、上野国細谷村（現群馬県太田市）に生まれた勤王の思想家、高山彦九郎と初めて出会い、その後も彦九郎は江戸小石川の水戸藩上屋敷内に居住していた赤水を訪ねている。京・大坂での遊学は、好奇心旺盛で話し好きな赤水の人柄とも相まって、多くの知識人との交流となり、自らの学問、そして地図作りに有益な時間となった。

（おのでら・あつし＝放送大茨城学習センター所長）

『清槎唱和集』に掲載された唐船と唐人（高萩市歴史民俗資料館）

2022.11.15（火）　東京新聞